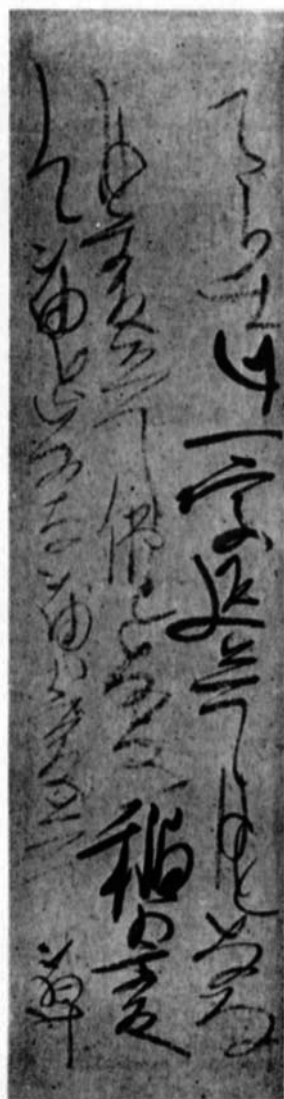




今月の御聖訓



〔法華経の一字は大地の如し万物を

出生す。一字は大海の如し衆流を

納む。一字は日月の如し四天下を〕

てらす。此ノ一字返じて月となる、

月變じて仏となる。稲は變

じて苗となる、苗は變じて草

〔となる、草變じて米となる、

米變じて人となる、人變じて

仏となる。女人變じて妙の一字

となる。妙の一字變じて台上

の釈迦仏となるべし。〕（一）部分真蹟なし）

【王日殿御返事 全集一二六三頁】

目 次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
お講講話「色心不二について」	菅野憲道	2
《宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修》		8
【御大会式講演】「いつとなく日月にかけをうかぶる身なり」	坂口麗道	9
【カメラ・アイ】《御大会式》		10
【所感】「高齢化を目の前に思うこと」	森 秀之	18
恵日だより		20

十二月の行事 師走詠草 恵日俳壇

巻頭言

陳腐化

菅野 憲 道



パソコンが故障して修理に一週間ほどを要した。その間のメールやデータの送受信、買い物、決済や送金、調べ物や執筆、クリニックの予約などを放棄して読書や掃除に専念した。IT機器が普及して便利になったことは確かだが、その分パソコンやスマホのトラブルに振り回されることも多くなった。

朝の通勤を終えるとパソコンの電源スイッチを入れるのが日課となつて久しく、依存症や視力低下の副作用があつても止められない。思うに科学技術の進歩は急速で、いまや幼児でもタブレットやスマホを使う時代だが、スマホ操作に没頭する若者の姿を目にする度に、これで人間は本当に幸福に向つているのだろうかといつも疑問に感ずる。

リニアが新幹線にとって変わつても、マイカーが自動運転になつても、ドローンタクシーが普及しても人間はどれほど幸せになることができるのだろうか。

パソコン修理のついでに故障したプリンタ、陳腐化したスキャナー、ハードディスク、ドライブ、マウス、ケーブル等の様々な周辺機器を処分しながら、こういう消費社会が果たして健全なのかと戸惑いを覚えた。最新技術も消耗品で賞味期限が切れれば陳腐化という名の粗大ゴミとなる。ようやく覚えたアプリケーションソフトの操作も、たちまち時の流れに取り残される。

もつとも急速な技術革新の前に一番陳腐化しやすいのは自分自身であり、人間そのものであるから、画期的な最新技術などといつてはしゃいばかりもいられまい。

押印廃止やFAX廃止の政府方針を聞きながら、社会の急速な変化にどこまでもついて行くべきなのか、それとも周囲のことや便利さなどは気にせずマイペースで行くべきなのか、戸惑っている。もつと大きな問題があるはずなのだが。

お講講話(要旨)

拝読御書 「千日尼御前御返事」(全集一三二五頁)

色心不二について

菅野憲道

《心こそ大切に候へ》

阿仏坊・千日尼は、佐渡流罪中の大聖人に帰依した名主クラスの地侍で、老夫婦がわが身の危険を省みず、夜中塚原三昧堂に食物を届けてお護りしたことはよく知られております。

また、在島中すでに宗祖より十八枚続の大幅の御本尊を頂くほどの強信であり、ご赦免により帰還され、後に隠栖された身延へは、同行の国府入道と連れ立って三度までお訪ねされました。更には九十歳で没した後には子の守綱が、その遺骨を首にかけて二度お参りされており、曾孫は日興上人の弟子となって富士に登られているなど、篤信の一家です。

千日尼への御消息文は三通現存しておりますが、この「千日尼御前御返事」では、法華経は十方三世の諸仏の御師なりと説いて、法華経を供養することの功德は莫大であることを説かれます。また阿仏坊の篤志の陰に、妻の千日尼の深信あることを賞されとともに、老齢といい、佐渡島と身延山の隔たりといい、再び相まみえることの叶わない身となって、思慕の念いを

募らせる千日尼の思いを受け止めて靈山浄土での再会を約します。すなわち本文に、

「佐渡の国より此の国までは山海を隔てて千里に及び候に、女人の御身として、法華経を志ましますによりて、年々に夫を御使ひとして御訪ひあり。」(同)

と、遙か遠くから身延山中の大聖人のもとに、女人でありながら法華経・大聖人を供養するために度々夫の阿仏坊を遣わされたことは、三世の諸仏も法華経も釈迦多宝も十方の諸仏も、千日尼の厚い志とご覧になっているといわれ、そして、

「譬へば、天月は四万由旬なれども、大地の池には須臾に影浮かび、雷門の鼓は千万里遠けれども、打てば須臾に聞こゆ。」(同)

と、月は遙か遠く三十八万kmの彼方にあるのですが、どれほど遠くにあるうとも、池の水面には即座に月影を映すし、雷がはるか遠くで鳴っても、一瞬のうちに聞こえてくるようなものです。身体は物質であるから物理的に遠く距離を隔ててしまえば相見ることとは出来ないが、心は時空の制約を超えて瞬間にここ

に來たつてゐると喩えられ、信心の要諦を示されます。

「御身は佐渡の國にをはせども、心は此の國に來れり。仏に成る道も此の如し。我等は穢土に候へども心は靈山に住むべし。御面^{かお}を見てはなにかせん。心こそ大切に候へ。」(同)

千日尼の御身は佐渡から離れることはないが、心は甲斐の身延まで一緒に來られました。成仏の道も同じことで、我われの身体は穢土に縛られておりますが、心は妙法蓮華經を信ずる故に直ちに靈山淨土に住むのと同じ事です。たとえ遇うことができたとしても心が通わなければ詮無きことです。妙法蓮華經を受持する心があれば、時間と空間の壁を越えて大聖人のもとにおまゐりできるのであり、その心こそ大切だといわれているのです。

《唯心論と唯物論》

これについて、大聖人と現代人の我われの物の見方、考え方の違いという思想的、哲学的な問題が起こってきます。

現代の思想・哲学は唯物論と唯心論が二つに大別されます。

唯物論の、物質的存在は人間の心や意識と関わりなく実在し、すべての物事は物質に還元されるという見方と、唯心論の、そうではなくすべての物事は根源的には人間の心や精神によって認識された現象であるという二つの立場があります。



「阿仏房夫妻夜中に食を届ける」

現代思想の主流は弁証法的唯物論(自然と社会の歴史的過程を物質的存在の弁証法的発展として説明した理論)であり、それを批判する形で、ヘーゲル、カントや最近では以前にとりあげたマルクス・ガブリエル等の観念論があります。この観念論

対唯物論の論争は多様な価値観を生み出し、思想的には混乱と停滞した状況を生み出しつつあるように思います。

いわく「結果がすべて」「観念論だ」「死んだら無になる」「人の心も金で買える」等々、現代の世間でよく聞く言葉は、目に見える物しか信じないという唯物論的思考で裏打ちされているものです。

もし、ただ単に、生物の人類種として動物的な人生をおくりたいのであれば、「人生に意味など無い」などと嘯いて、煩惱の赴くまま無自覚に生きていけば良いのです。よう。しかし一度「自分とは何ものであるか」「何のために生きるのか」「生と死」と人生の意味を問い、自覚的、主体的に生きようと思う時に、生はより精神的な問題

となります。

古来諸宗教の説くところ、神話や伝説を教条化し、現実を軽視した唯心論的な教説が大半を占めておりました、中世暗黒時代と称されるキリスト教の支配する中世社会は、ガリレオの裁判のように科学を抑圧し、合理主義を否定し、人間性を抑圧し

た結果、社会は閉塞してしまいました。その反動、批判としてルネサンスと宗教改革が起ります。このことが近代合理主義を基調とする近代化に波及して現代につながるのです。

現代思想は物事を二つに分けて分析する二元論が基本です。

有と無、主と客、自と他、心と物、生と死、天と地、などあらゆるものを分別するのが知性の根本で、哲学も科学もあらゆる分野の学問が二元論で分析的、帰納的に形成されます。

コンピュータもCPU（演算装置）で動きますがその基本は、1ビットという最小単位から1OR0の二進法でプログラムが作成され、その上に8ビット11バイトという基本単位（半角英字分）が規定されます。これこそ文字通り有無の二元論でスーパーコンピュータやAIのような複雑な作業にまで拡大するわけです。このように二元論による現代の分別智はめざましい成果を上げ、その長所を上げればきりがありません。

しかし、こうした二元論の分別智に執することは、分けられたものの間に新たな争いが生じます。分断、格差、差別、競争、対立、孤立、不信、力による制圧等です。

また、科学技術の進歩が必ずしも人類に幸福をもたらすとは限らず、原発事故や軍事技術開発競争のように人類に破壊させかねない危険をかかえます。

《色心不二ということ》

しかし、仏教は唯心論でも唯物論でもありません。「色心不二論」です。色（物質）心（精神）は、二にして不二というものです。

もとより一般仏教では生命を五蘊（色、受想行識）と把えて色心二法を説いているのですが、天台教学では、妙楽大師が法華玄義の十妙を解釈して法華玄義釈で十種の不二門を立てられます。即ち、色心・内外・修性・因果・染浄、依正・自他・三業・権実・受潤の十不二門は大聖人も依用されるところであり、一念三千論に通ずる内容をもっております。

不二とは二つのものが独自の存在ではなく相依相関して成り立っていることを意味します。

したがって、千日尼に「心こそ大切なれ」と仰せられたことが唯心論を意味するわけではないのです。

他の御書では「心の師とはなるとも心を師とせざれ」という經文を引いて、心を越えた主体を想定しております。また「蓮盛抄」には禅宗の「是心即仏、即身是仏」を破折して「心は是れ第一の怨」という正法念處經の文を引いております。

要するに「心こそ大切」に執して身業を軽視するのは誤りで、「人の振る舞い」「色心ともに法華經を遊ばされ」ることが、肝要なのです。

一般に仏教は「心の問題」として心法を重くみる唯心論に近く、現実の問題や身体的、物質的問題には触れない傾向が強いのですが、法華經・大聖人はしからず、色心不二・物心一如・凡聖一如の深い哲理を内包しており、文句に「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とあるように、経済活動や家庭生活でも妙法蓮華經の信心を受持するならば即是道場に変わるのであり、現実の生活の中において淨仏国土を期するのです。

たいていの場合、生命とは肉体であると思っっているようです。

が、仏法では色心不二といって、身体と心、色心二法が、二にして不二だという考え方です。

世間一般に心法の方は肉眼では見えませんので、どうしても身体の方が生命の実相であるくらいに思っ、心の存在すら忘れていたのです。身体と心というのはまったく二にして不二ということが、よく理解できていないのが現代人ではないかと思ひます。

ところが、考へてみると分かりますが、身体健康維持には氣を付けたたり、あるいは身体を磨く、最近では化粧どころかボディケアみたいなことがいわれ、筋トレとか、ジムが大はやりして、身体を手入れすることには熱心になつていくようです。

しかし、心を磨いたり浄化する人はというと、誰もいないのです。心の方はほったらかしという状態です。むしろ、動物と同じようにただその時々によつて本能的に起こってくる欲望や感情を、ますます燃えさからせていくような人が多いと思ひのです。多くの人の心は病んでおります。

人間観について言えば、自分と社会や自然という関係を考えて場合に、それを表現するのに多くの人は、まず一つの点か〇を書くでしょう。まず自分がいて、その周辺に夫とか子供などと、点か〇の記号を次々に書いていきます。その外側に友人、同僚……、しかし、考へて見ると、そういう孤立した一個の点



身体は鍛へても、心の方は……

としての自分というのは、あり得ないのであつて、いつでも誰かと繋がっているのです。社会や自然界といろいろな因縁で繋がつていて、その繋がりの中で今の自分がいるのです。

もし仮に戦争や災害が起これば、たちまちいまの生活は一変してしまふし、人間性まで一変してしまふに違ひないのです。

あるいは自分の家族が交通事故でも起こして警察に呼ばれたら、たちどころに自分の人生は変わつてしまひます。

ですから、図にするなら沢山のつながりを線に引いて、その交点によつて自分が表されるのではないでしょうか、そのことを仏法では網の目に譬えるのです。一目をつまみ上げれば繋がった全体まで影響するのです。自我意識では自分が孤立しているように思ひますが、実際には他者と様々につながりがあるのです。

身体と心の関係でいえば、心が病んだら身体も調子悪くなることが多くあつて、例えば心配事があつて、それを思ひ詰めると、終ひには鬱病になつたり、拒食症・不眠症となり、

ストレスからさまざまな病氣を発症することになります。また逆に病氣のために心が折れて、ストレスを抱え、心の方まで不安定となり、失調症となることもあるようですから、どちらが先ということはいえないのです。

身体の中には心があつて、心は時間とか空間を超越してある

のですから、ずっと遠くにいる人の心がわかることもあるのです。

《通ずる心、共鳴する心》

よく単身赴任で、夫が遠くへ行ってしまうことがあります。その場合でも円満な夫婦は心が通い合っていると思いますが、逆に一つ屋根の下で生活をしていても、心の通わない空々しい夫婦関係もあります。

心というのは、側にいなくても通じないこともあれば、見知らぬ昔の人の本を読んで感動することもあります。その心が伝わるのでしょうか。信仰することは、境地冥合といいますが仏心を我が心とするということで、心が通ずる、心が伝わって来ることに於いて、初めて信心が成り立つのです。

我われが、日蓮大聖人のお心をどれだけ受け止めているか分かりませんが、世間の人は表面的なことだけです。度重なる法難を乗り越えられたとか、あるいは首の座にも動じなかったといったことは知っているのですが、大聖人のお心が一切衆生をして何としても成仏せしめようという、深く大きな慈悲であることを知らないのです。

大聖人は晩年身延に籠もられるのですが、もともと大聖人は名利に淡泊で名誉欲のない方なのです。法華経には上行菩薩は大地の底の静かなところで、ひたすら仏法を修行されているとありますが、要するに派手なことを好まない、どちらかという静かな生活が理想的だったのです。

しかし、それでも当時の宗教状況は乱れて悪化し、真言・念仏や禅など、人々を破滅に導くようなエセ仏教の悪法が蔓延し

ていたため、見るに見かねて、止むに止まれず決起して法を説かれたのが本当だと思うのです。

大聖人のおふるまいは、よく強引とか、一方的な主張といった評価を受けがちなのですが、その止むに止まれぬという慈悲の心が分らないと大聖人の本当のお姿も見えてこないのです。自分の人生を作り出すのです。また、その時代の人々が時代を作り出していくのですから、我われがこういう社会に住んでいることは、我われの心が生み出した世界だといえるのです。

心というのは何を欲求しているのか、何を求めているのか、あるいはどういうものに価値を見出すか、あるいはどういう生き方をしたいのかということは、みな心の問題ですから、そこからいろいろなものが出てくることになると、その心は果たして次元の高いものか低いものか、あるいは確かなものか、あるいは間違っていないのかを、考えてみなければいけないと思うのです。

仏教ではもともと、現代人が自分であると錯覚している貪欲の心、瞋恚の心、愚癡の心、あるいは慢心の増上慢の心、この三毒四悪の心を毒と譬えているのです。我われが日常的に持っている自我意識は、ほとんどの場合煩惱ですから、それを毒と表現されていて、それを放っておくとだんだん毒が回っていつて、命が悪い方向へ、濁った方向へ汚染されてしまうのです。だんだん自己中心的になって、親子でも自分の欲求を妨げる邪魔な存在と、対立的に捉えてしまうことになるのです。

本当は、お互いに助けたり助け合ったりしているのが、人間の本来の姿ですが、それが敵に見えたりしてしまうのです。

《法華經の色心不二》

法華經の教えを法界ということから考えますと、小さな自分から、我われが南無妙法蓮華經と信仰することによって、そういう小さな自分は錯覚、単なる幻想であつて、本来はもっと大きな宇宙大の南無妙法蓮華經と一体となつた自分であるという信心、要するにすべての執著とか我見とかこだわりといったものから解放されて、本来あるがままの仏様と同じ命、同じ境地に、知らず知らずに近づいてくるのです。

「妙密上人御消息」には、

「麻の中の蓬、墨うてる木の自体は正直ならざれども、自然に直ぐなるが如し。經のままに唱ふればまがれる心なし。当に知るべし、仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか。」（全集一二三九頁）

と、お題目を唱える、法華經の御本尊を信ずることは、麻の中の蓬のようなものでまっすぐに育っていくのです。また、大工さんが曲がつた材木に墨壺から糸を引いてきちつと墨を打って直線が引かれると、木自体は曲がつているけれども、直線によって真っ直ぐ使うことができますのです。

なるほど我われも、年中身勝手な欲望や感情、あるいは愚癡



雪の阿仏房妙宣寺

の心をもって、どうにもならないことをグチグチと考えたりするのですが、そういう時にお題目を唱えると、自然にそれらが解消されてしまうのですが、それはちょうど、

「仏の御心が我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか」

というふうに、仏の心が我が身に入ってくるからだといふのです。

法華經では、「以信得入」といって、信をもつてしか入ることができないといわれているのですが、信はまことの心ということ、信心といふのです。「日女御前御返事」にも、

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり」（全集一二四四頁）

といわれていますから、我われが素直な心をもつて南無妙法蓮華經とお題目を唱える時に、その命はそのまま法界全体に周遍し、あるがままの姿において、仏の心がそのまま入ってくるのだと思います。

最近、心無い人や、心の貧しい人が増えてきたようです。心の中で見えないから何を思つても良いだろうと思つてか、邪な思ひを懐く人が多くなつたような気がします。せめて一心清浄のお題目をとなえたいものです。大聖人の仏法は唯心論ではなく、色心不二を説くのですから、信行一致、身口意の三業一致の信心に精進したいものです。

南無妙法蓮華經

（了）

日蓮大聖人の常住をお祝いする

宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修



源立寺恒例の宗祖日蓮大聖人御大会式が、十一月七（土）の御逮夜法要、翌八日（日）の御正当会の両日、法華講・檀信徒が集って厳肅裡に奉修されました。

今年のお会式は、年初からのコロナ禍の終息が見えない中での奉修となったため、お逮夜・正当会とも人数の制限を設け事前申込制となりました、マスク着用、参詣前の検温、手指の消毒等、感染防止に皆様のご協力をいただきました。

そんな中、七日の御逮夜は、午後六時、出仕鈴が打たれる中ご住職が出仕され着座、法要が始まりました。寿量品に入り「而説偈言」で磬が打たれると、有師（大谷吾道執事）、立正安国論（住職）、大聖人（渡邊信朝師）、興師（尾林弘三講頭）、目師（松井照雄副講頭）、道師（井元恵子さん）、行師（森秀之副講頭）の申状が、朗々と捧読されました。読経終了後、菅野ご住職の挨拶に続いて、岡山市興風談所・渡邊信朝師より、ご講演をいただきました。

翌八日の御正当会も、朝から快晴で穏やかな一日となり、早朝から準備のために婦人部、地区役員、幹事の協力により、テントや下駄箱の設営、ご供物の準備などが行われ、あわせて受付、台所など裏方の用意も終え、教区ご僧侶の到着と法要を待ちました。

御正当会は、午後二時、出仕鈴によりご住職、教区ご僧侶が出仕・着座されて始まり、始めにご住職が献膳され、読経・焼香・申状捧読と如法に進められ、終了後、大阪市東成区・伝正院・坂口麗道師により、「いつとなく日月にかけをうかぶる身なり」（九頁から掲載）と題してご講演をいただきました。

講演の後、お花くずしが行われ、御大会式は滞りなくすべて終了しました。御会式にあたり、諸準備にご協力いただきありがとうございました。

いつとなく日月にかげをうかぶる身なり

伝正院 坂口 麗 道

《御会式の意義》

みなさん、本日は誠にめでとうございます。

みなさんが、本日の宗祖日蓮大聖人様のお会式法要に参列なされておられることは、その法要の意義を充分にご存じである為、参列なされた。と拝するものであります。

あえて充分にご存じのみな様に、お会式の意義を申しあげることが大変心苦しいのですが、お話をさせていただきます。

宗祖大聖人様は、弘安五年十月十三日に御入滅なされました。これは、インドの仏様が亡くなられて二二二一年目の年

です。ちなみに現代でよく使われる西暦でいうと一二八二年です。つまり宗祖は一二二二年にご誕生なされ、一二八二年に御入滅なされたということです。一二二二年にお生まれになられた時を昔は一歳と数えますので、御入滅は六十一歳であられたことになります。

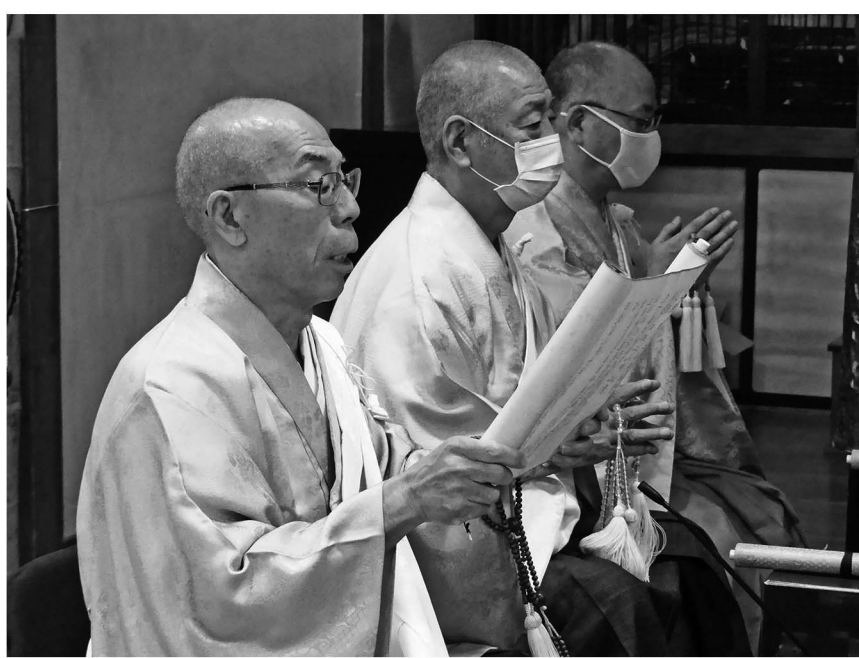
ということ、宗祖は西暦一二二二年のお生まれで、来年二〇二一年が、宗祖御生誕八百年で、八百歳をお迎えになる年となります。

さて、本日は、令和二年の十一月八日です。宗祖の時代の旧暦でいいますと、九月の二十三日で、お月様が真半分になつて空に上がります。そして、宗祖が御

入滅なされた旧暦の十月十三日は、いつかといいますと、今の暦では今年は十一月二十七日がその日となります。だいぶ寒い頃という感じが致します。

宗祖日蓮大聖人は、弘安五年十月十三日、辰の刻・午前八時頃、聖寿六十一歳、武州の池上宗仲邸・現在の東京都大田区池上において、御入滅あそばされました。この大聖人様の御入滅は、御本仏の滅不滅・常住此説法のお姿を私たち凡夫にお示しなされたものと拝し、その御報恩のために、僧俗こぞつて御会式法要を奉修して、お祝い申しあげるのです。

その御入滅の際に瑞相が起り、日興上人の「御遷化記録」によりますと、御



教区ご僧侶による申状の奉読

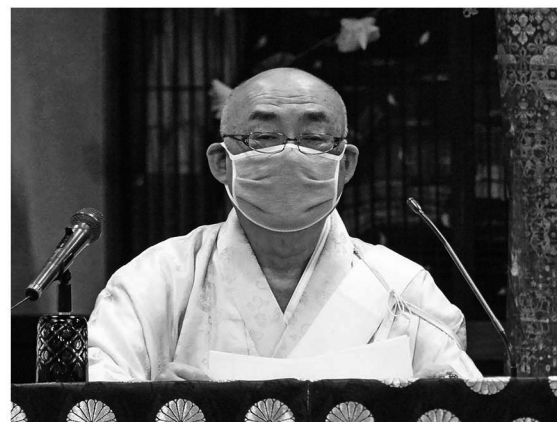


御住職の立正安国論奉読

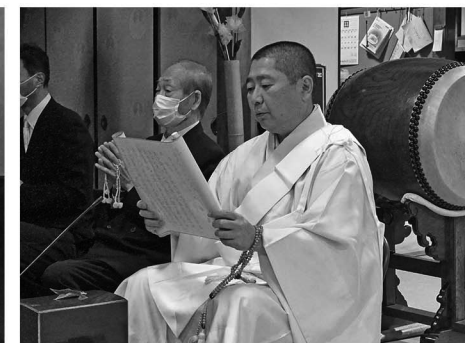
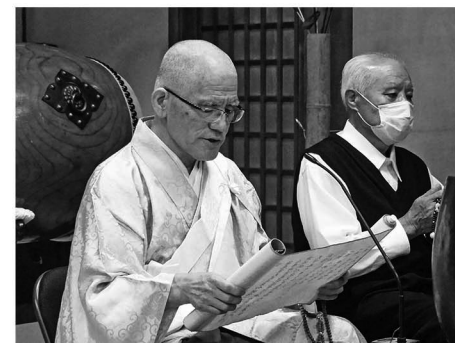


教区ご僧侶による申状の奉読

《カメラ・アイ》 《令和二年御大会式》



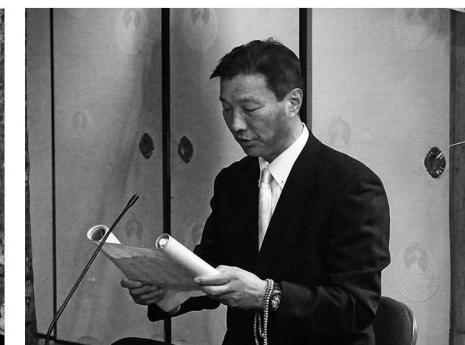
坂口麗道師によるご講演(御正当会)



静渡邊信朝師によるご講演(御逮夜)



法華講代表者による申状奉読(御逮夜)



(9頁下段よりつづく)

入滅と同時に大地が振動したと記されており、また、伝説によれば、時ならぬ桜の花が咲いたと伝えられており、よって現在、御宝前を桜で荘厳にするのは、このことに由来するのです。

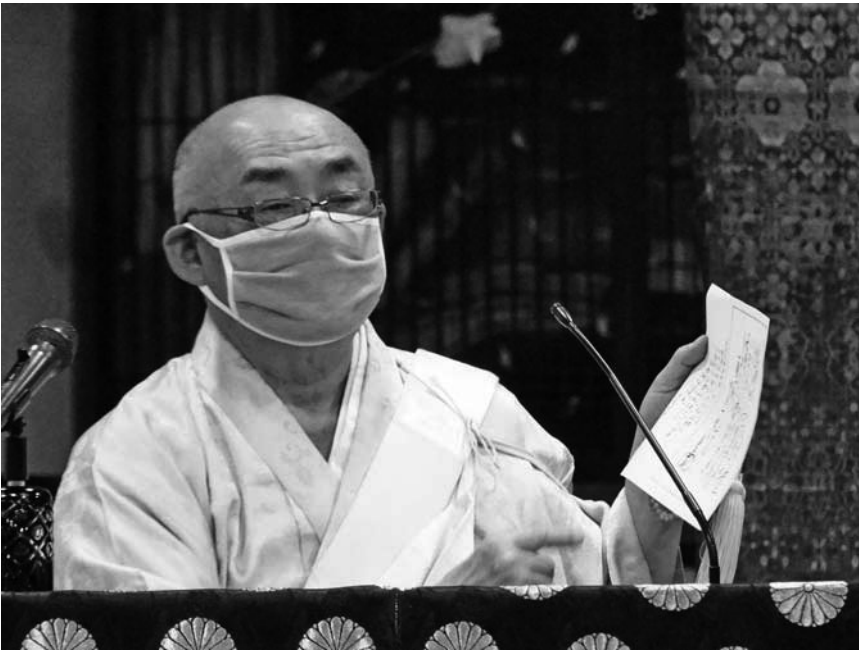
みなさんが朝夕に読経されている寿量品の自我偈の中に、

「衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現ず、しかも実には滅度せず、常に此に住して法を説く、常に此にあつて滅せず、方便力を以つての故に、滅不滅有りと現ず」

とあります。つまり、分かりやすく言いますと、自分

「人々を教化する為に、方便で仮に死んだとします、しかし本当は亡くなっている、いつも側に居て法を説いて

いる、いつも側に居て居なくなることはない、方便によって滅不滅、亡く



講演をされる坂口麗道師

なる亡くならないことが有ると表している。」

と説かれております。

つまり、この法華經の御文を拝読し信じて、寿量品の仏の存在を感じられる人は、自分の側に自分を見守る仏が常にいるというふうに感じていくことが大事である、法華經に説かれているのです。

そうはいっても、仏様が法華經に説かれる言葉ではありますが、自分の側に常に仏様が見守っていてくれるとは、中々信ずること、感ずることはできにくいと思われませんが、そのようにお説きなので、すから、まず自分の側で仏様は見守っていてくれていると、心の底から感じていくことが、信心の上においては大事なことであると思います。

《私の好きな御書》

ここで、私が大好きな宗祖の御書を紹介致します。

「日蓮こいしくをはせば、常に出づる日、ゆうべにいづる月ををがませ給へ。いつとなく日月にかげをうかぶる身なり。又後生には靈山浄土にまいりあひまいらせん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。」(全集一三五頁)

と認められている御書です。

大聖人様は、佐渡島に流罪になられて、足かけ三年ほど佐渡島に居られて、そこで教化されて御信者さんもだいぶふえたのです。その御信者さんを後にして赦免されたが故に、信者さんを置いて佐渡島を離れて鎌倉に帰られて、鎌倉で三度目の国家諫暁をされて、その後身延山に入られていくのです。

この御書は、五十四歳の時、建治元年の六月十六日に書かれたお手紙ですが、大聖人が佐渡島を離れて残された国府尼^{こうのあま}等の女の方々は、もう大聖人様とお目にかかれなのです。ここで、佐渡島を離れた時から、佐渡島に残されたご信者は、もう二度と会えないのです。阿仏房、あるいは国府入道といわれる一部の人たちは、御供養の品々を背負って、佐渡島から海を渡って、歩いて十四日・五日とかかって、身延山の聖人様のもとに供養の品々を届けられて、またお目にかかつてはおりますが、他の方々はみな大聖人様とは今世の別れだと、もう二度と会えないんだという思いで寂しが

っておられます。

その残されたご信者の方を思われて、大聖人が、

「日蓮こいしくをはせば、常に出づる日、ゆうべにいづる月ををがませ給へ。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり。」と仰せになって、寂しいならばお日様・お月様を見なさい、そこに自分はいると。また、

「又後生には靈山浄土にまいりあひまいらせん。」

成仏してまたお互い会いましょうねと、仰せになっている、非常に残された人のことを思いやった、非常に優しい言葉であると思います。

このお言葉は、国府尼御前に対する手紙でのものですが、今現在に残っている我われにも当てはまる、信者として、信仰するものとして、大聖人様をどのように見なければ良いのかという姿勢を表しておられるありがたい手紙であると思います。

この御書を見ていくと、「常に出づる日」、「ゆうべにいづる月」とありますが、

お日様・お月様というのは、どこでも見ることが出来ます。

北海道であっても、九州であっても、もちろん大阪でも、また国が変わっても、アメリカであっても、この地球上に存在している誰もが、お日様・お月様は拝することが出来る、つまり仏というのはどこでもいるんだということを、あえてこのような言い方を作されているのではないかと思います。

朝が来れば、お日様を大聖人と思って拝すればいいし、夜になって寂しいなと思っても、外を見るとお月様となつて、我われを暖かく見てくださっている、そういうふうに拝していけば、先ほど読んだ寿量品の御文と同じではないですか。滅することはなく常に存在して、信仰する者、日蓮の教えをそのまま受け止めて、仏道修行しようという人に対して、じつと見守って、会いたいと思えば側にいてくださる、そういう立場に立つておられると取ることが出来ると思います。

我われが信心していて、渴仰恋慕の心、

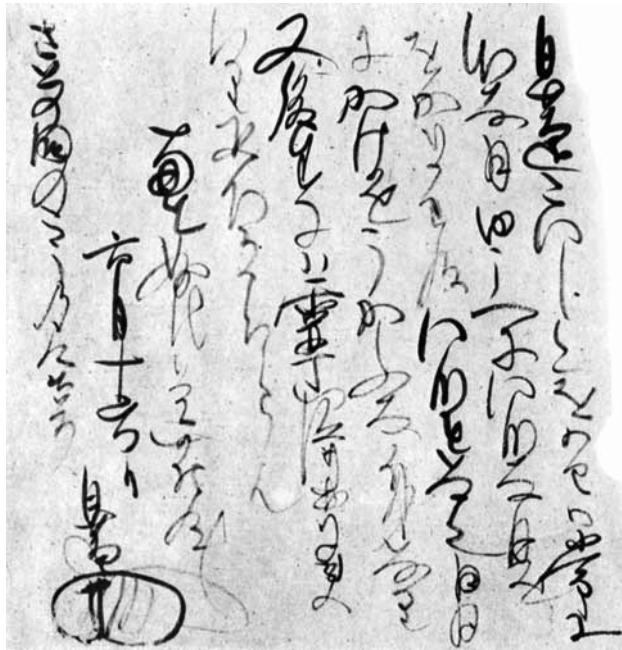
大聖人を思う気持ちさえなくさなければ、常に我われは大聖人の側にいることができると思うのです。

ご存命であられた時には、大聖人の側まで行かなければお目にかかることができなかつたのですが、ご入滅、亡くなられたことによつて、大聖人様を思うといつでも会えるようなお立場になられた、ということになってきて、寿ぐ、お祝いすることができるようになった、ということではないかと思うのです。

ましてや、ここで自分のことをお日様やお月様に譬えて仰せになつて、常に自分を拝みなさいという言い方をされていることを思うと、我われ、この大阪の、この令和の時代にあつても、大聖人は常にいらつしやると拝していくことが、とても大事ではないかと思うのです。

信仰も、ある程度進んでこないと、中々そういうふうには思えないものです。人間というのは、常に自分の目とか自分の頭とか、自分の人生経験とか、それだ

けでものごとを推し量ろうとして、南無妙法蓮華経と唱えたならば、そのままそこで成仏しているんだと、大聖人様が仰せになつたとしても、それよりは、本当だろうか、あの人が見ていると一所懸命お



「国府尼御前御書」の当該部分

できると仰せになつて言言葉よりも、自分の主観的なものの考え方で判断して、信仰をしているのではないかと思うことが、自分を振り返るとあります。どうしてもそれが先になつてしまうのです。

しかし、我われは大聖人を信じて、大聖人の教えに従つて信仰しようとする以上は、そういう見方をちよつと捨てて、それよりは、大聖人の言葉をそのまま受け止めて、ああ、この時に成仏させていただいているんだ、ありがたいといつて、喜びの心をもつて題目を唱えていく、そう自分の信心を切り替えていけたならば、どれだけ幸せなことかなと思う時があります。

お題目を唱えつつも、それだけありがたい題目だとは思わないで、だんだん年を取つてきたら膝が痛くなつてきたなあとか、声も出なくなつてきたなあとか、若い時にはもつと朗々とお題目をあげられていたのに、というようなことばかり考えて、そしていつの間にか勤行が終わつていく、というよう

なこともあるのではないかと思います。
ですから、信仰するということは、何

を差し置いても、大聖人をそのまま受け止めて行くような素直な、正直な心で信心していけたら、そんな楽しい、素晴らしいことはないのではないかと思います。

私の知っている少し障害のある人で、あまりしやべったりできない人ですが、ただ「ここでお題目を唱えなさいよ」というと、「はい」と言つて何時間でもあげられる人がいます。

その人の姿を見て、自分もこういう人のように、素直にお題目をあげられるような人間になれたらよかつたなあと思うことがあります。

中々そうはできなくて、格好を付けたりと、時間を気にして時計を見たりとか、あまり長くなったら迷惑かなとか、いろいろなことを考えて、自分の世界で自分の信心しかできていない人間から見れば、その人を見るとすごいなと思うのです。素直に受け止めて題目を唱えて、ニコニコしながら「ありがとうございました」といってお寺から帰っていく人を

見ると、こういう信仰をしたいな、と羨ましくなったことを覚えています。

信仰というのは、年が行けば行くほど、だんだん体も効かなくなってきましたから、若い時のようにいなくなってくるし、あれもできなくなった、ここもこうなってきたと、だんだん辛いことが年齢とともに増えてくるのです。

自分が臨終のその時まで、信仰の喜びを感じながら、ずっと人生を送れて、いざ臨終を迎えて、「南無妙法蓮華經、みんな先に行っているからね。待つてるよ。今までありがとう」と言つて、亡くなることができたなら、どんなにいいかなと思つたりします。

それはそうですね。ここが痛い、苦しとか、なんとか薬を打って貰いたいなあとか、そんなことばかり考えながらお題目をあげていても、大聖人様の仰せになった題目ではないし、心からの南無妙法蓮華經じゃないんじゃないかと思うわけ、だから、しっかりとした心構えというか腹を決めていないと、お題目を唱えながら臨終を迎えるとか、その間まで

普通に毎日の中にお題目というものが、自分の人生に生きてくることは、なかなか無いのではないかと思つたりしています。

大好きなこの御書を拝する度に、大聖人を忘れて大聖人の信心はどこにもない、大聖人様の言葉を素直に受け止めて、そしてお日様・お月様に合掌するような信心をしたいなと思うのです。

《悔いの無い人生のために》

前にも話したことがあります、私は若い時に桜宮の浄妙寺というお寺に八年ほどいまして、そこで正信覚醒運動が始まって、そこのお寺で五百五十所帯くらいの法華講ができたのです。本当に寝る間も惜しんで頑張りました。みんなお寺に来る人来る人、全部創価学会と縁を切つて浄妙寺の法華講に入つて貰つて、一から信心をやり直そうといつて、ずっとやつて来たのです。

そして、二十九歳の時に、阿部日顕師が猊座を簞奪した頃から弾圧が始まつて、浄妙寺の住職も勇気があまりない人でし

たから、慌てて方向転換したりしたのですが、それでも頑張って信者さんが五百五十所帯になって、住職ともだんだん喧嘩状態になってきましたが、とにかく来

られた方に責任を持っていきましたよ、みんな住職を頼りにしてこのお寺に集まっているのですから、今更ここに来て、やっぱり学会に戻れな

どと言えるわけがないでしょう、というようなことを話まして、そうこ

うしているうちに、
「麗道君、君はいつ頃出て行くんだね。」
と言われまして、それは出て欲しいということですかという話になっ

て、
「わかりました。何れ出て行きます。ここではとてもじゃないけど、正信覚醒運動とか、本当の信心を目指して進むことはできない状態だから……。」

ということ、大阪市の地図を広げて、大阪のど真ん中はどこだろうと見ると、東成区の今里あたり、大阪城のちよつと

南側が大阪の中心だから、このあたりで布教所を、ゼロからスタートしようと思

って、そこに場所を決めたのです。



松下幸之助起業の地とも伝える伝正院

それ以来、学会を辞めてずっと正信覚醒運動をやって来てくれた中の心ある人が、一緒に移ってきてくれて所属してく

れて、応援してくださっているのです。
当初、たくさんの人が布教所を見に来てくれましたが、「また来ますね」と言

って、二度と来ない人もかなり多かったですが、それでもいいといつて残った百五十所帯くらいの人

がだんだんできて、狭いところで肩寄せ合って、ゼロからスタートして、そして今日に

来たっているのです。

そのような背景の中で、やはり素直な人が最後まで残っていくのではないかと

思います。そして、そこで開所して以来、

もう来年で四十年になります。その間、

二百二十六件、信者さんをお葬式をして

送って来ています。みんな本当にいい人

ばかりです。

もちろん、伝正院は障害のある人とか、

あるいは人生がうまくいかなくて、誰か

らも相手にされなくなった人とか、身寄

りが無くて誰も守ってくれる人が無くな

った人とか、そういう人を中心に集まっ

た布教所ですから、大方三分の二から半

分くらいは、入院や住宅入居の保証人に

住職がなったり、死んだ後の始末や葬式、

お骨は伝正院で預かるというようなこと

をずっとしながら、もうすぐ来年で四十
年になってきています。

結局、そういう信者さんと接して思っ
たことは、家とか格好とか関係無く、た
だただ大聖人を思う気持ちが強い人だけ
が、ずっと共に信仰して来られたのでは
ないかと思って、私は感謝しているのだ
す。

信心をしていて、いろいろ学会で言っ
ていたような、高級車に乗ったりとか、
お手伝いさんがいるような生活をしてと
か、世間がうらやむような立派な家庭生
活とか、仕事に恵まれてどうのこうのと
いうのを目指している人には、伝正院は
向かないのではないかと思うし、大聖人
様の仏法はそういうものとは違うという
思いがあります。

とにかく、自分の人生というものを、
本当によりよくして、悔いの無いような
終わり方をするためには、大聖人の仏法
こそ、一番正しいのではないか、いい信
心なのではないかと思うのです。

なぜならば、先ほどいいましたように、
我われを大聖人様がお日様・お月様、昼

夜常に見守ってくださっている、そして
幸せになれよ、元氣を出して頑張れよと、
必ず成仏できるのだから、良い人生を送
っていきよと励ましてくださっている、
そういう信仰を我われは今しているのだ
すし、そこに気がつく、人に分かな
くてもいい、誰に理解されなくても、御
本尊様・大聖人様に暖かく見守ってい
だいて、理解していただければ、心を任
せていただければ、それでいいんじゃない
かというくらいに思っ、頑張ってい
けばいいんじゃないかと思ったりしてい
ます。

私は、この間古希を迎えまして、体が
コキコキいいますし、七十歳になっても
こき使われています。体が動く間は一所
懸命頑張ろうと思っ、もう七
十歳になったということは、ここにも私
より大先輩の方がたくさんいらっしやい
ますが、残りのカウントダウンが少し始
まっているのかなと思ったりもします。
私も、病気持ちですし、体は大きいで
すが気は小さいですから、ビクビクしな
がら毎日いますが、やはりいいよ来る

ものが来ているんだとは思っています。
だけれども、大聖人を信心していたな
らば、腹を決めていつか死ぬ時まで笑顔
で自分の人生を、楽しい信心をして行け
たらいいんじゃないかと思っています。
御会式にあたって、こんな話で誠に申
し訳ないのですが、ぜひ大聖人のこの言
葉、

「日蓮こいしくをはせば、常に出づる
日、ゆうべにいづる月ををがませ給へ。
いつとなく日月にかげをうかぶる身な
り。又後生には靈山浄土にまいりあひ
まいらせん。南無妙法蓮華經、南無妙
法蓮華經。」

と仰せになっていることを決して忘れな
いで、毎日頑張っ、信仰を続けていた
きたいと思っ。

みなさんが、いい人生であつたという
喜びを感じていただく様、御本尊様に御
祈念しています。そう思っ、毎日信心に
頑張っ、いただきたいと思っ。

ご清聴ありがとうございます。

南無妙法蓮華經。

【所感】

高齢化を目の前に思うこと

大阪地区 森 秀之

一九五〇年代の日本人の平均寿命は六十代そこそだったようです。企業戦士たちは現役を終えた段階で、人生もほぼ終焉に向かっていたのではないのでしょうか。

しかし、現在の平均寿命は女性 八十七歳、男性八十一歳になりました。人生一〇〇年時代とも言われ、今後はますます長命になっていくことだろうと感じます。

言ってみれば、いまの高齢者はまだまだ元気なのに、ひと昔前と同じように六十歳でお役御免となり、暇を持て余している世代だと言えるのではないかと思います。

こういう私も、来年に還暦を迎え高齢者の入り口にさしかかります。

最近スーパーマーケットのレジで年配の男性が定員さんに怒鳴っている光景に出くわしました。（本当に高齢者は切れやすいのかなと見てました）

よく街中でキレる高齢者の人や、企業などに対して悪質なクレーム（いわゆるカスタマーハラスメント）をする人も、定年後に自治会に参加し、横の人間関係であるべきところに、企業の縦社会の関係を持ち込み、役を持つと威張る人や、家庭で威張る人が、社会問題として取り上げられることがあります。結局は、その多くは元気な高齢者が暇を持て余しているからなのではないのでしょうか。

暇を持て余しているから、寂しさを感じたり、承認欲求が出てきたりするのだと思います。

その一方で、定年後に余生を楽しもうと夢を描いていた人が病気を患い、入院を繰り返しつつ人生を送る人、また他人事のように思っている大半の方が、現実には年々増加している認知症患者として、

施設等で、家族にも看取られることもなく人生を終える人もおられることも事実です。よく定年後に、二十年も三十年も暇を持て余していれば、ネガティブにもなると言われています。またあることないことを吹聴する高齢女性たちも、やることなく、語弊があるかも知れませんが、ある意味生活に余裕がある高齢者にとつては手持ち無沙汰なのではないかと思うことがあります。

これからの高齢者は、退屈で不機嫌にならないために、高齢期の生き方を前もって考えておく必要があるのではないかと思います。

というより、これから高齢期を迎える人たちは、現代の現役高齢者のように暇を持て余すこともなく、年金額も減少傾向で、引退して余生を送ることすら、一部の富裕層以外は、厳しい状況になると思います。

生涯現役として、死ぬまで仕事をしていかないと生活もままならない未来になつていくのではないかと思います。

それと、高齢者と社会の間にコミュニケーションのギャップが生じているということが考えられるように思います。

トランプ大統領のアメリカではないですが、日本の社会も急激に二つに分断されているのだと思います。情報を自由に得られる人たちと、そうでない人たちの二つです。そして、後者のほとんどは、高齢者が占めていると感じます。もちろんパソコンやスマホをバリバリ使いこなして情報を得る高齢者もおられます。しかし、それは例外に属するのだと思います。情報が得られないのが高齢者のサイレントマジョリティ※注1です。

年齢を重ねると、目や耳の機能が低下し、脳の働きも衰えて、情報を獲得、処理する能力が低下すると言われています。しかし、暮らしてゆくための情報は増えるばかりで、二十年前は電車に乗るためにそれほどの情報は必要ではありませんでしたが、今では全く不親切な自動券売機を操り、複雑怪奇な乗り換えルートを通り、尋ねる駅員のいないホームから目的の電車に乗るためには、多くの情報とその処理が求められるのです。辛うじてスマホが使える私たち世代は「乗換案内」という便利な情報源で対応ができませんが、高齢者の多くの人たちは、その恩

恵に与えることはないのだと思います。高齢者の犯罪者数が増え始めた平成六・七年（一九九四・五年）はインターネットの普及初期と重なるというデータがあるそうです。さらにインターネットの利用が一般的になりIT※注2（Information Technology）ではなく、ICT※注3（Information and Communication Technology）といわれるように技術の進歩がコミュニケーションの形を大きく変え始めました。

この十年で、インターネットは水道や電気といったライフラインに次ぐ重要なインフラとなりつつありますが、殆んど高齢者の方は、我関せずと気づいていないのではないのでしょうか。

そのために、インターネットスキルによる情報格差はますます大きくなってゆくのは間違いないと思います。さらにIoT（Internet of Things）で情報だけではなく、物にまでインターネットが関わり、人々のQOL※注4（Quality of Life）にまでその格差は広がろうとしているのだと思います。

その差は、貧富の差とは違った、これ

までにない軋轢を生んでいるのではないかと感じます。それが高齢者のイライラに繋がっていると考えています。人類の歴史を振り返ればわかることですが「追いやられた方の辛さ」は、「追いやった方」には見えにくく、理解しにくいのは世の常だと感じます。

幸い、必然の縁で法華經の信仰を持っている私たちは、先月号（十月）『恵日』にもありますように、利己的な行為に走らないように、しっかりと題目を唱えて、ここを自分自身の成長させる道場である、仏道修行の道場であると捉えて精進することが、一番ありがたいことと、感謝の心を身口意の三業に感得出来ることのように感じています。

注

※注1 サイレントマジョリティ：「静かな大衆」あるいは「物言わぬ多数派」という意味で、積極的な発言行為をしない一般大衆のこと。

※注2 ITとは、情報を取得、加工、保存、伝送するための科学技術。

※注3 ICTは、日本語では「情報通信技術」、「情報伝達技術」と訳される。

※注4 QOLは、「生活の質」、「生命の質」などと訳される。



御会式の準備が着々と

恵日だより

大掃除・お花作り

十一月一日（日）午前九時半

御会式を一週間後に控えた一日、午前九時からの講中勤行会終了後、九時半より、御会式の準備の大掃除とお花作りが行われました。

この日は、朝から天気もよく暖かで絶好の大掃除日和となりました。例年の通り、大掃除は本堂内では仏具やすす払い、窓ふき等、また、本堂の外回りや庭など、普段はなかなか手の届かないところまで丁寧に行われました。

大掃除が一段落すると、婦人部によって準備されたおにぎりや味噌汁に舌鼓を打ちながら、早めの昼食をいただき、小憩の後、午後からはお花作りが始まりました。

本堂内に並べられた机の前で、全員参加で、あらかじめ婦人部によって作られたお花と葉を竹に巻く作業が始まり、午後三時過ぎ頃には、一五〇本のお花が完成し、後片付けを終えて解散しました。

また、五日（木）午後一時より、有志の方々によって、本堂玄関、山門の幕張り、完成したお花の御宝前への飾り付けが行われました。



真剣に法話を聴聞（目師会）

目師会

十一月十五日（日）午後一時

朝から好天に恵まれ、昼間は暖かい一日となったこの日、第三祖日目上人のご高徳をご報恩申し上げる目師会が、午後

一時より奉修されました。

篤信の方々が集まった本堂では、午後一時の出仕鈴によりご住職が出仕され、法要は献膳、読経、唱題と如法に奉修され、その後、ご住職より「三祖の意義」についての法話があり、参詣者一同と共に日目上人のご高德を偲びました。

七五三祝い

十一月十三日

十一月十三日、午後三時より御宝前において、平田家の七五三祝いのお詣りがなされました。

読経唱題の後、住職より御本尊頂戴の儀があり、千歳飴をいただいた後、七五三祝いについてのお話があり、記念撮影をして終了しました。

・池田市 平田琉仁くん 二歳



平田家の皆さん

ご案内・お知らせ

*元朝・正月勤行会のご案内

令和三年の元朝勤行会・正月勤行会は、新型コロナウイルス対策として、例年とは異なる形での奉修となります。

◆まず、一月一日午前十時、午後二時の正月勤行会は、混雑が予想されますので、両勤行会とも人数を各四十名とし、事前

申込制とします。

一日に参詣を希望されます方は、予め本堂掲示板の参詣者名簿に記載するか、受付に電話申し込みをしてください。

◆また、正月勤行会恒例のお屠蘇・昆布の儀は、感染予防の観点から、明年は取り止めることに決定しました。

◆参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒、参詣前の体温測定等、感染予防に努めて下さい。

※源立寺本堂の玄関・トイレ前等にアルコール消毒液が置いてありますので、参詣の際はご利用下さい。

*新年の抱負を募集します。

毎年『恵日』新年一月号に掲載される「新年の抱負」への投稿を、広く講員の皆様方から募集します。ふるっての投稿をお待ちしております。

なお、原稿の締め切りは、第二日曜のお講日である、十三日が締め切りとなります。



十二月の行事



一日 (火) 午後二時 お経日

六日 (日) 午前九時 講中勤行会・幹事会

七日 (月) 午後二時 広基寺御大会式

十三日 (日) 午後一時 お講・役員会



※一月号の継命・恵日発送は、

『兵庫』地区が担当です。

二月号の継命・恵日発送は、

『槻木』地区が担当です。

【師走詠草】

しらきぎが 足にて探り 餌をあさる 〔和風〕

水田ゆらゆら 輪のひろごりぬ

三才児 背負ひて登る 竹田城社

ひそと咲きたり 川原なでしこ

【恵日俳壇】

〔農婦〕

この朝に果ててしまふや冬の蜂
イマジンの歌詞和訳さるレノンズディー

〔森秀之〕

十三夜コロナ禍映す明と暗
コロナ禍や三密避けてススキ原
生石ヶ峰山一面のすすきかな



恵日

令和二年十二月号 通巻三一一号
令和二年十二月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (〇七二) 七五一三二三五

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替

口座番号 0138012112649